

令和 6 年度埼玉県障害者施策推進協議会  
第 1 回ワーキングチーム（A チーム）会議メモ

令和 6 年 7 月 1 0 日（水）  
1 4 : 0 0 - 1 6 : 0 0  
福祉部会議室

参加者：佐藤委員（リーダー）、大井田委員、石橋委員、山中委員、金井委員  
欠 席：なし  
他チーム参加者：なし  
傍聴者：なし

次第 1 サブリーダーの選出について

石橋委員をサブリーダーに決定した。

次第 2 令和 6 年度のワーキングチーム（A チーム）の進め方について

佐藤委員）

第 6 期計画は令和 5 年度で終了し、今年度から第 7 期計画に入っている状況です。令和 6 年度のワーキングチームでは、次期計画である第 8 期計画の策定に向けた重点課題について協議するのか、それとも現行の第 7 期計画における重点課題について協議するのか、どちらになりますか。

事務局）

次期計画である第 8 期計画の策定に向けた重点課題について協議をお願いするものです。言い換えると、第 8 期計画に盛り込むべき施策について協議していただくということになります。それをこれから 2 年間で検討し、まとめていただくということになります。

佐藤委員）

第 1 回協議会資料の資料 2－3「第 8 期埼玉県障害者支援計画の策定に向けた重点課題の検討に関する論点例」には、中心課題となると考えられる項目が示されていますが、初年度としては、これらに加えて新たに検討をするものが必要なのかと

か、これらをやはりもっと充実させていく必要があるんじゃないかということを確認していく作業が必要という理解でよろしいでしょうか。皆さんもその点のご理解をいただいてよろしいでしょうか。

事務局)

あと、モニタリング資料のことで補足させてください。例えば、皆さんから特定の課題ないしは施策についてご意見をいただいたときに、すでにどういった施策があるのか、関連する施策をこのモニタリング資料の中で確認していき、事業概要とか事業実績などの部分を見て、その上でまだちょっと取り組みが足りないとか、すでにこういう施策が行われてるけれども、他にもこういう取組であるとか事業が考えられる、あるいは、他の新しい施策を入れる必要があるのではないかなど、そうした確認のために使っていただければと思います。

佐藤委員)

いまの確認のところで何か質問のある方はいらっしゃいますか。

～質問なし～

### 次第3 ワーキングチームの検討課題について

#### (1) 障害者への理解促進と差別解消について

佐藤委員)

Aチームの検討課題としては「障害者への理解促進と差別解消」についてというところが中核になっており、計画の施策体系でいうと、大柱の「理解を深め、権利を守る」、さらに中柱の関係となっていくところだと思いますが、まず皆さんの方から、少し全体を通じて、こうしたところを第8期に向けて重点に置いていく必要があるんじゃないかとか、あるいは第6期を踏まえた第7期計画でも謳われてはいますが、その内容について気になるところとか、大事にしていく必要がある部分など、それぞれ委員の方でご意見がありましたら聞かせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

石橋委員)

いま、佐藤先生が聞いているのは、次第の「(1) 障害者理解促進と差別解消について」の部分ということでよろしいでしょうか。

佐藤委員)

先程の資料2-3に示されている3つの論点例を中心にみていくことが必要なのか、他のことについても考えていく必要があるのか、全体的にどのあたりを皆さんとみていくことが必要なのか、一本の流れができてしまうと、なかなか発言しにくくなると思うので、皆さんの考えをまず言っていて、確認できればと思います。

先程の論点例で示されたところをスタートとするというのも1つですし、あとは次の議題になりますが、民間事業者の合理的配慮の提供が義務化されたこととか、障害者差別解消法とか合理的配慮の提供について理解が進んでないという現状がある中で、彩の国いろどりライブラリーところとも少しリンクする内容でもあります。

どこにポイントを置いていくのか、先程申し上げた資料2-3には論点例を示してありますが、やはりこの辺のことを中心に置きながら検討していこうかということになれば、そこになりますし。そのあたりはいかがでしょうか。

山中委員)

障害者の理解促進といった場合に、足が不自由とか、車椅子ユーザーとか、目が見えないとか、そういう分かりやすい障害がある一方で、例えば、発達障害や知的障害、精神障害の場合は分かりにくく、何を理解したらいいんだろうと思います。

合理的配慮ってすごく求めにくいですよ。分かりにくいし、当事者はそれを発信しにくいわけだから、障害者の理解促進といった場合に、そうした障害の場合は皆さん何を知りたいんだろう、そうした障害は個別なものだから、結局はその人の話を聞いて、その人を理解することしかできないわけです。一般的にこの障害はこんな場合もあるって言ったところで、あまり意味がないっていうか、特に精神障害の場合は、一般の人に何を分かっていたらいいんだろう、何が一番疑問なんだろう、精神障害者への合理的配慮ってなんだろう、そもそも論にいつも戻っちゃ

うんですけど、それがすごく難しいなと思います。

身体障害の説明を聞いて、こういう配慮が必要だというのは分かるけれども、特に知的障害とか精神障害の場合の合理的配慮っていうのが、こちらは何を求めているかわからないし、受け取る方も何を理解していいかわからないでしょうし、そのあたりが課題なんだろうなって思うんですね。

佐藤委員)

例えば、身体障害と言っても部位によって全然違うし、原因となる疾患等も違うし、知的障害といっても身体障害や精神疾患と重複していたり、障害には多様性がある。一方で、障害というものについて、一般の方は「足の不自由な人は怪我をしたからだ」と思う人もいます。子供に、怪我をして足が不自由なのだからいずれ直ると先生が誤解させてしまう例もありました。

半身麻痺で動けない人、病気でそういう麻痺が出てきたとか、加齢に伴って車椅子を利用してるとか、そういう多様な障害の理解というところでも、誰を対象に何をどう理解してもらう必要があるのか。彩の国いろどりライブラリーでは、まずは身体障害の方たちの登録からスタートしますが、だんだんと様々な障害のある方たちが自分たちの立場を理解してもらう機会となるよう進められることが望ましいと思います。重点課題でも、そのためにはどんなことをしていく必要があるのか、計画にしっかり落とし込んでいく必要があるんじゃないかと思います。

山中委員)

そのあたりの難しさというか、ともすると家族と当事者が対立してしまう場合があります。それから家族の話がすべてじゃないっていうところと、あと埼玉県では教育現場で精神障害に対する教育が始まっていますよね。モデル校が。それとの関連とか、精神障害の場合の合理的配慮はこう説明するっていうのと、誰でもかかるし、自分が不調になったら言ってねみたいなスタンスになるかと思うんですけども、社会生活とか職場とかで理解を促進するという話になるとまた別のスタンスが出てくるので、課題も幾つかあるかなと思うんですね。

佐藤委員)

一つには、まず学齢期の子たちの障害理解を促進する、教育担当部局の協力を得て学校教育の中での理解促進を具体的に進めていけるような形にしていく必要があることを、こちらから伝えることも必要だと思います。

直接関係するのは特別支援教育担当課とは思いますが、児童生徒の福祉理解に向けて、義務教育担当課の理解を得ることも大切だと思います。大学のある新座市は、「共に育ち、学ぶ」よりよい就学に向けて取り組みは始めているところもあります。

ただ、山中さんのお話のとおり、何をどうすればいいのか分からないという人も出てくるので、そういう意味では彩の国いろどりライブラリーなどで、当事者の話を聞く機会がつかれるとか、そういう形で具体化していくというのが必要になると思います。

学校教育の理解と協力を得ていくようなことを重点課題として推進していく必要があるということについては、ご異論のある方はいらっしゃいますか。

石橋委員)

賛成です。埼玉県の一部どれぐらいの市が、新座市みたいな取組をしているのかは分かりませんが、成功例だと思うんですね。どんどん普及啓発をしていけばいいのかなと思います。あと、障害者への理解促進と差別解消と言うと難しく聞こえますが、障害難病や福祉に関わっていない人にとっては、合理的配慮とは何ぞやという段階だと思います。そういった中で2、3年たったら広まって、次の第8期計画の期間、令和9年度あたりでは、その合理的配慮をどう決め込んでいくかみたいな話に進んでいると思うので、具体例などを集めて、県民の方や学校の方が知り得るようなものができているといいと今の話の中では思いました。

佐藤委員)

県の方はどうですか。合理的配慮に関する動画と作成し、努力されていると思います。

事務局)

「心のバリアフリーバンドブック」も今年改訂を検討していますし、法改正に合

わせて、昨年度から企業などにも周知をさせていただいています。今年も県内企業向けの研修会を開催する予定ですので、皆さんに知っていただくための努力、特に企業がお客さんに対して合理的配慮を提供するためのものを中心して実施することになります。県としても、そういった形で知っていただく機会を捉えていく形で、今年も検討しております。

事務局)

職員が行ってデータの資料に基づいて説明したり、紙媒体じゃなくても配布できるものもあるので、それを見ていただきながら説明するということが今はできますし、そういった形で機会を捉えてお話するというようなことは今年も予定しています。

佐藤委員)

すでにある取組をもっと発展的に実施して、より良くなるということであれば、あまりコストをかけずに充実できると思います。

行政や警察、企業でいうと銀行とか、お年寄りや障害のある人たちが関わる様々な場所に、合理的配慮の提供を普及啓発していく必要がありますし、合理的配慮の提供に関する取組の具体例はいろいろなところで行われていると思いますので、それをリサーチして確認し、生かしていくということだと思います。

合理的配慮の提供に関する取組の具体例を、学校をはじめ、様々な機関に周知することができるようなものを、生かしていくという意見がありましたが、他はどうですか。

石橋委員)

山中委員から、例えば知的障害のある方に対する合理的配慮は何をすればいいのか分かりづらいという話があったかと思うんですけど、実はすごく進んだ疑問だと思っていて、合理的配慮という言葉を知り始めた人たちは、例えば知的障害のある方と接した時に、まず言葉が通じるのかとか、文字なら通じるのかとか、そういう段階から多分知らないと思うんですよ。そういうところから伝えられればいいのかと思います。ここで話していることって、一般の方からすれば、すごく進んだ

疑問になっていて、合理的配慮の説明を私も何回かしたことありますが、「例えば、例えば、」ってよく質問されるので、その「例えば」を増やしていけばいいなと思います。

山中委員)

今のお話で思ったんですけど、このあいだ県から送られてきた「心のバリアフリーバンドブック」の改訂案に対して御意見をくださいみたいなのは、やっぱり身体障害に関する例がすごく具体的で分かりやすい一方で、発達障害と精神障害の部分はほとんど同じで、分けては書いてありますが内容がほとんど同じなんですね。

多分、相手の障害に沿った配慮ができにくいっていう、他の様々な障害全部そうだと思うんですけども、当人に今何か困ってますか、ここの職場でどんなことに困ってますかと、率直に聞けるような態度っていうか、そういうものをまず啓発したらいいと思います。特に精神障害とか発達障害の場合は、必要な合理的配慮ってその都度ちがいますし、精神障害というのは気持ちの波があるので、すごく活発に動いていて今仕事をしたいんですっていう時と、今とても体が動きませんっていう時と色々あるので、本人に今どうしたの、何か困っているの、何があったら楽になるのとかを聞いて、相手を理解して、自分がそこに配慮できるみたいな、そういう気配りというか、それで偏見を持つのではなくて相手に対する気配りができるようなことも含めたらいいのかなって思ったんですね。例えば、お店の出入口に何かをつけるとか、椅子がこうとか、メニューにひらがな振るとか、そういうことだけじゃなくて、相手に対する気配り、分からなかったら素直に聞いていいんですよって、偏見なく聞くことは全然構わないので、今私はどうしたらいいですかとさっと聞けるみたいな、そういう項目も入れていただくと良いのかなと思います。

佐藤委員)

まず接し方というか、実際にどんなふうに接すればいいのか、そういう意味でも精神障害や発達障害のある人たちへの理解というのが十分でなく、合理的配慮の具体例は、やはり身体障害の方が多いいえるかもしれません。

彩の国いろどりライブラリーも、スタートは身体障害の方が中心となっていますが、精神障害や発達障害、難病などの理解について意識して具体例を収集整理して

具体化していく必要があると思います。他はどうですか。

大井田委員)

私は視覚障害者で全盲ですが、視覚障害者に対する理解促進っていう点から言うと、やっぱり小学校とかに行ってお話をさせてもらう機会が多いんですが、子供たちからすると、視覚障害者イコール見えない人、イコール不幸な人っていうような目で見られるんですね。でも私のような全く見えない人は、視覚障害者の中でも1割から2割程度なんですよね。

残り8割は弱視の人で、普通に電車の中でスマホをいじってるとか、書類を見てるとかで、普段杖も使わないで歩いたり、文字についても視野は狭いんですが、視野に入れば普通の文字も読むこともできるし、そういう人が私の代わりに学校に行ってお話をした場合、子供たちから見たら、どういうふうに理解してもらえるのかなと思います。

やはり全盲と弱視では全く違うし、この人も視覚障害者なんだよって言っても普通に歩いてるし、杖もついてないし盲導犬も使っていないし、この人は目の不自由な人なのって、理解促進って一言で言っても、ちょっと難しい、幅が広いっていうか、そういうのを感じることがあります。

佐藤委員)

そういう意味では、障害理解について大枠での理解も必要だけれども、周辺理解だけにとどまってしまう可能性もありますし、もう少し踏み込んだ障害理解が必要になると思います。

学校教育の中でよく行われているのものに体験学習がありますが、そういった体験学習の質の充実が必要になると思います。彩の国いろどりライブラリーなどがその入口になりますし、障害の多様性を理解していただけるようなツールとして、合理的配慮の具体例を冊子にするとか、映像にするとか、県の障害者福祉推進課が作った動画などを活用することなどが考えられます。

あと出ていたことは、精神病院に入院している患者への虐待とか施設や学校、家庭など様々な場所で発生する障害者への虐待。虐待防止、権利擁護、こうした部分もやはり重点を置くべきではないかということがこれまでのところで述べられてき



ていますが、こうした点についてはいかがですか。

山中委員)

精神科病院が非常時の避難所、福祉避難所に手を挙げなかったというのがすごく衝撃だったんですね。精神科病院だからこそ精神障害の人の置かれた困難さが分かるはずなのに、何故そこで手を挙げないのだろう。だから虐待の問題は本当に偏見のなせる技というか、今までの政府の施策がそうさせたんでしょかって、精神科病院のあり方とか、人員が他の病院の半分、5分の1とか、少なくていいとかね。

そういうあり方そのものがいまだに引きずられていて、病院内での虐待と違って、もう手に余る話かなと思うし、とにかく精神科病院が避難所に手を上げてくれることが第一歩かなと思ったんですね、この前。そこは病院でしょうっていう。

結局、Aチームの課題って、Bチーム、Cチームの課題と重なってくるんですね。3つが上手く前進してかないと難しいのかなって思ったんですよね。

精神障害者の置かれた状況っていうのは、病院を退院するときに家に戻されてしまって、本当はそこで自立させないと自立のチャンスがなくなってしまうんですね、結局病院にいますか、お家に戻してますかって。グループホームとか少ないですし、お家で引き取りましようっていうと、ずっと家族が抱え込んでしまう実態が多いので。グループホームは聞くとところによると、結構悪質で、補助金だけ受け取って、ひどい虐待をして、いざとなったら閉めてさっさと逃げてしまう。

佐藤委員)

ここでは施策の一つとして位置付けをしていくので、今のような病院か家かという選択が、何人もが同じような悩みを抱えてるとすれば、それは社会全体の課題として普遍的なものになってきますから、他に地域社会の中で関わり得る社会資源がつかれるのかどうかという話になってくる訳ですよ。

私は地域福祉が専門ですが、結構「見込まれる地域」というのがあるんですよ。長野の例などは、地域でサロンが運営されていて、精神科病院の先生が、患者の社会復帰に向けて、そのサロンを紹介している。だからその場所は、誰が来ても拒まない、と見込まれてるわけですよ。

こうした事例は虐待を解消できる直接的なものではないかもしれませんが、地域に居場所を作っていくっていうようなことも考え方の一つとして出せると思うんですよね。

山中委員)

そうですね、だから家族としてできることというのは、地域に働きかけて、病気を抱えていてもそのまま住み続けられる地域にするということですよね。引きこもっちゃう人もいますよね、隣近所にも黙っていて言えなくなっちゃって、親子で外へ出なくなっちゃう。それが最悪ですから、住みやすいというか、隣近所とか地域の人の理解を求めて顔が出せる地域にしていく、そういうのも大事なのかなと。

佐藤委員)

地域において、自治会や地区社協などが、そういった取り組みを続けているところはあります。そうした拠点のような場所にオープンスペースを作ることで、障害のある方が地域とのつながりを持てる場になるということが分かってきた。

先程の精神障害の方の話などは、石橋さんがおっしゃったように、そうした取組の具体例を示して、そうした場が地域につくられていくことが今後は必要なんじゃないか、それを地域と共に考えていく。

障害理解と言っても、地域の人たちをどこでコミットするのかというと、なかなかその機会を作れていないので、特別支援学校を卒業しても、なかなか地域に帰れずに施設へ行ってしまう。また、どこかに就職できたとしても、これまで地域と一緒に育った人達がいらないから、親と当事者の人間関係をさらに豊かにしていくことが難しくなりかねない。

精神障害の方との関わりは、少し難しい面もあることは確かなんですけど、やはりそうした取組をしていかない限り、なかなか交流が生まれなし、周りの意識も変わっていかないなので、既存の地域資源と上手に連携し、働き掛けを行っていくのも一つかもしれません。

ここまでの確認になりますが、まずは障害者理解においては障害福祉というものを大枠の理解をするとともに、特に障害の態様は多様なものであり、個人によって

すべて違うということを理解してもらおう。目が不自由と言っても、全盲の方たちだけではなく、弱視の方たちの方が多くて、そういった弱視の方の立場に立った配慮、そういう理解を図っていくことが必要ではないか。

また、多様な障害に対応した体験学習などのあり方、体験学習などの質を充実させていくっていうことの必要性、特に学齢期の子たちに向けた啓発と学校の教職員の理解を図り、そうしたことを意識的に推進してもらえるよう義務教育課程をはじめとする学校教育の所管部局に働きかけていくことの必要性などについても述べられました。

山中委員)

一点だけ。その時に注意して欲しいと思うことに、ステレオタイプにしないということがあります。体験学習などを一生懸命やればやるほど、紙に書けば書くほど、それがステレオタイプで擦りこまれてしまい、想像力を働かせることができなくなってしまうよう、障害は人によってすべて違うこと、弱視の方も一人一人全部違うし、精神障害も一人一人全部違う。その人はその人だということを、特に教育現場などでもきちんと理解させる必要があるかなと思います。

佐藤委員)

今どうしても平等とか対等みたいなのが求められる風潮があって、皆同じみたいになってしまいますよね。なかなか言葉の理解って難しいところがあって、その多様さをどう理解していくか、その違いをどう理解していくか。目が不自由な方、精神に波を持っている方とか、一つのステレオタイプにならないような配慮を学校教育の中でしていく、だから教員の理解を意識的に進める機会を持っていかないとけないんですよね。

山中委員)

その人として見る態度っていうのがすごく大事ななと思います。子供たちにとっても同じことだと思うんですよね。一人一人違うことなんだよっていう。

佐藤委員)

まずは、学校の理解と、あとは合理的配慮の具体例を多く明示できるようにしていくってことが、障害理解に繋がっていくのではないかとということ。

あとは、精神障害の部分については、精神科病院が避難所に手を挙げないっていうのは、やはり地域との関わりがつくられにくい状況も考えられる。そういう意味では、先程からのお話のような地域における居場所づくりと、それに向けた働きかけ、障害のある人たちとともに生きる地域づくりをしていくということが障害理解のために必要になってくるのではないかとということも述べられました。

そういったことが、重点課題の（１）障害者への理解促進と差別解消について出てきています。他には何かありますか。

金井委員）

当事者の側からすると、表立って障害がありますっていうのをなかなか言いづらいところがあって、特に公共の場に行って、車椅子を見れば分かるのだけれども、気にはしてくれてはいても声を掛けてくれる人は今まで誰もいなかったというところはああるんですね。

子供が中途障害だったので、最初の頃はもうショックが大きくて、親の方としても外には出せなかったんですよね。出したくなかったし、見せたくなかったしっていうのが10年ぐらい続きました。下を向いて生活してたっていうところですね。

やはりそれじゃ駄目だと思って、ある程度オープンにするようになりましたが、どうしてオープンになったのかというと、やはり特別支援学校に通学するようになって、同じような仲間がいて、同じような環境にいる保護者がいて、そこで少し繋がりが持てたということが一つありましたね。あとは時間が解決してくれるという感じで、なるべく外に出すようにしたんですけれども、やはり一線は引かれてるのかなという感じはどうしても否めないですよね。

制度的には合理的配慮の提供が謳われてはいますが、地域にコミュニティの場を作っても、果たしてそこまではなかなか難しいところではあるんですよね。そこに行くとしても、やはり同じような障害を持った親たちが集まっているから行くというところで、一般の人はそこには来ない。多少は来るんですけど、じゃあスポーツ大会やりましょう、お祭りやりましょうって言っても、それは障害者とその親たちのコミュニティでそういうイベントをするので、一般の人もちよっとお手伝いで

っていう感じになるので、果たしてそれが地域コミュニティと言えるのか、疑問に思っているところなんですよね。

私たちはもっと外へ出なくてはいけないというのは重々分かってはいるんですけど、その辺のさじ加減ですかね、一般の人もどう助けていいのか分からないって人も当然いると思うんですよね。そのあたりを上手くリンクできるといいのかなとは思ってます。

佐藤委員)

ある障害者支援をしてる NPO の話では、一般の方があまり理解をされてないというんです。町会の方たちにその NPO が、地域イベントに障害のある人も来れるようにと言ったら、来ないだけだよって言うんですよ。

しかし、車椅子の方が 1 人で行ってスムーズに利用できるような場所ではなくて、なかなか出向けなくなってしまう。車椅子の方を知らないだけで町会の方も悪気はないのです。

NPO が当事者の方の立場を代弁することで当事者の方が自分の気持ちを言えるようになる。そうすると町会の方も、不便であるということに気付いて、変わって行って、一般の方のイベントに障害のある人も出ていけるようになる。そういうのが何年か続くと、それが当たり前になって、そのあとで子育てをしている若いお母さんたちが、年寄りや障害者のことばかりではなく子供たちの遊び場のことも考えて欲しいっていう意見を出してくるようになる。

そういう場を意識的に地域につくっていくことが、地域福祉のまちづくりになるということもあるので、そういうところとなかなか今まで障害福祉がコミットしてないっていうところだと思うんですよね。

障害のある方と一般の方とつなげていくためには、その地域でのそうした取組に重ねていけるようにするきっかけを作っていかなければいけないっていうのがあるんじゃないかと思います。

金井委員)

あとはやはり当事者側の問題として、本人と親の考えが違うということがあります。本人は行きたいんだけど、親は出したくないというのがあるんですよ。親

の意見の方が強いから、では行かないっていうことになってしまうところがあるのかな。

本人は町内会に行きたいんだろうなと思ってはいるけど、親がちょっと面倒くさいし、その日は仕事があったり、いろいろ予定があるからっていう理由で行かないとか、そういうのはどこの御家族もあるのかなっていうところがありますね。やっぱり親の意見がどうしても強い。

親が連れていけないといけないっていうところもあるので、いろんな地域の資源を使って、本人だけでも連れて行ってもらえるサービスなどを使えばいいんだけど、やっぱり手続きなどの都合で、日程を合わせてとなるとちょっと大変だっていうところで、どうしても抱え込んでしまう。それが長きに渡ってしまうところが、一つ大きな問題なのかなと思います。

佐藤委員)

それは 8050 問題、老障介護の問題とも関係していて、親が若い時には何でもなくても、高齢になれば親にも介護の必要が出てくるし、子供には重度障害があって、親が倒れた場合に、子供の介護を助けてっていうのを近くに言える人がいれば未然に防げたかもしれないけど、言えない地域の状況っていうのがあって、そうならないためには早くからの地域との繋がりを作っていく必要がありますし、当事者同士でお互いに助け合えるピアサポートなどの要素も必要だし、そうした諸々の要素が上手く機能して、重なって支えられるような仕組みが多分これから必要になると思います。そうしたことを、地域福祉支援計画などにもつなげていく必要があるのかなと思いますね。

石橋委員)

今の話を聞いて思ったのは、単純に一般の方と障害のある方とが接する回数が増えれば増えるほど、理解は進むのかなということで、金井委員が先程、障害者のコミュニティの中に、一般の方が何人か加わるということを書いていたんですけど、その逆もまたあれば、少し一般の方に広まるのかなっていう。

例えば、障害理解を深めようみたいな会をよく障害者団体などがやると思うんですけど、そこに来る一般の方って関心のある方に限られるじゃないですか。

例えば、近所のイベントなどに、障害のある人も参加して欲しいというのがあって、そういうところで、そのときは直接会話をしなくても、車椅子の人も街中に一緒にいるんだっていうのをみんなに感じて欲しいというのがすごくあります。

金井委員)

アナウンスの仕方が難しくて、それだも行ってもいいのかなっていうところがありますよね。そのあたりが難しさ、行ったら迷惑になっちゃうんじゃないかなっていう、当事者側としてはそう考えてしまうので、そのところをもう少し配慮してもらって、アナウンスの仕方がもし言っても全然迷惑じゃないよって、そうなんでしょうけども、それをやっぱり理解できてないとなかなかちょっと、難しいかなっていうところはあるかもしれないですね。

佐藤委員)

体験プログラムを作る取組をしていた時に、ノーマライゼーションという概念を浸透させていく必要があるということで、「どなたでも参加できます」と周知したんですけど、来て欲しかった障害のある人たちが誰も連絡してくれない。電話をかけたら、「私たちが来ていいかわからなかった。障害者っていうのはどこにも書いてないから。」と、まさにおっしゃったとおりで、そういう子供を連れ出していいのか、当事者の家族は逆に迷惑になるのではないかと考えた。そういう垣根はやはり少しずつでも取り払えるような取組を段階的にやっていく必要があると思います。

石橋委員)

行ってもいいか迷った時、それを判断するための、いわゆるキラーフレーズみたいなものってないんですか。障害難病の方も参加できますって直接的に書くと逆に不自然だし、失礼に当たるというか。そういうマークとかはないんですかね。

佐藤委員)

一般的にはヘルプマークとかがありますよね。

金井委員)

自分の家族だけで行くとなると、かなり勇気がいるかもしれないですね。友達の障害ある人で一緒にグループで行くとかなら行きやすいのかな。あるいはそのイベントのサポートをしてる人に知り合いがいるとかね。来てよって言われれば、じゃあ行ってみるか、面白そうだねっていう。

ボッチャとか障害者スポーツの大会が市内でも開催されていて、行っているんですけど、やはり障害のある人がいっぱい来て、あとは支援者か保護者が来てやる大会なので、いつも大体同じメンバーなんですよね。だからもうちょっと一般の人も呼べるような、小学生とか子供たちを呼べるような感じで開催できるといいのかなあと思ってますけども、そこからまた少し広がったりすればいいのかな。でもなかなか難しいですね、チラシだけで呼ぶというのは。

石橋委員)

例えば、チラシに障害難病の方も参加できますというマークが存在したとしても、それだけだと行く気にはならないとか。

金井委員)

個人的な意見になるけれども、全員障害者のイベントであれば行きやすいのかなと。

佐藤委員)

それでは、まずは重点課題として資料2-3で示されているような3点を踏まえながら、これまでのお話の中で出てきた論点を、もう少し整理していく必要があるというところで確認をさせていただきたいと思いますので、その点よろしいでしょうか。

## (2) 彩の国いろどりライブラリーの運用上の課題について

事務局)



(資料「彩の国いろどりライブラリーの継続的運用に関する課題」について説明。)

佐藤委員)

はい。ありがとうございます。今後の課題として4点示していただいた部分、これに関して何か御質問などがありますか。

石橋委員)

この講師の質っていうのは、講演自体の内容の質のことを指すのか、それとも講師の人柄のことを指すのか、どちらでしょうか。

佐藤委員)

今回はスモールスタートということで、すでに県内で障害当事者講師として実績を積み重ねている方を講師に登録してスタートします。

DE T埼玉の方も講師になるまでに所定の研修プログラムを修了していますし、あったかウェルねっとの方も基本的には県社協の福祉教育ボランティア学習推進員養成研修を修了し、それぞれ皆さん実践経験をお持ちの方をお願いしています。

そして、これからその取組を継続して進めていくところで、講師の質をどう高めていくかっていうところでは、人柄もそうかもしれないけど、講師として聞き手に伝える力、その力が必要になってくる。話の組み立て方とか、分かりやすさ、あるいは聞き手を飽きさせずに理解できるようにするなど、そうした講師としての質が求められてくる。

事務局)

去年のAチームの議論の中で、希望すれば誰でも講師に登録できるような仕組みは絶対に避けるべきという意見がありました。取組の目的として障害理解の促進があって、先程、山中委員もおっしゃった、多様な障害があって、なおかつ人によってもそれぞれ違う、そこに障害者差別解消法の合理的配慮の提供とか、障害の社会モデルの考え方を踏まえた講座を実施していく必要もあって、子供たちや社会人にそれを正しく伝えられるスキルを持っている方を講師としていく必要がある。

言い方を変えると、障害のある人はかわいそう、自分は障害がなくて良かったです、そのレベルの理解とどまってしまうと目的を果たすことができない。その目的を達成できるスキルを持った講師の方である必要があって、そういう意味で、授業であるとか研修会をきちんと成立させられる方じゃないと、彩の国いろどりライブラリーが立ちいかなくなるんじゃないかという意見がありました。そういうふうに理解していただければと思います。

佐藤委員)

事務局が言ったような講師に必要となるスキルをどのように確認していくかなど、やはり動かしていかないと見えないところでもあるので、初期の段階では、協力団体との繋がりをベースにしつつ、事務局も見れる範囲のところ、まず動かしていこうと。そこが分からなくなると、收拾つかなくなっちゃう可能性もあるので、段階的にということですね。

石橋委員)

講師の質の担保というところでは、すでに講師を経験してる方を登録していくか、あるいは講座の参加者などにアンケートを実施して、それを講師にフィードバックして次に生かす、その2つが具体例になるかと思います。

新規の講師登録に関しては、すでに障害難病はそれぞれに団体があって、これまでそうした講演会などをやってると思うんですよ。その人たちに声掛けするのが最初かなと。

佐藤委員)

団体への声掛けに際しては、どういうことができる人に講師になってもらうのか、いくつかあると思いますが、医学モデルではなく社会モデルでの捉え方ができているとか、そういった整理をして、いろいろとフィルターを通していかなければいけないかもしれない。ただ、多様であるということを伝えることも大切なので、あまり条件を狭めすぎちゃうと、それこそステレオタイプになってしまうかもしれない。そうした難しさもあると思います。

山中委員)

発達障害とか精神障害の当事者が講師をするというのは、すごく難しいですよ。もし家族がサポートをするとしても、金井さんの話にもあったように、あくまでも家族としての立場で、その当事者としての立場に踏み込まない、そのあたりの線引きはすごく大事だと思うんですね。

もう一つは、よく精神障害の人たちが話すときに、グループで話したり、信頼している支援者とインタビュー形式で話したりとか、そういうちょっとした工夫があると、当事者の人も話しやすいところもあると思うんですね。ピアサポートの訓練を受けて仲間同士で話す、あるいはピアのリーダーとして活躍してらっしゃる精神障害の方もいらっしゃいます。1人で孤立して大勢の前で話すとなるとすごくハードルが上がってしまうので、仲間同士で座談会形式でとか、講師と言っても1対多数であると考えする必要はないのかなと思います。

いろいろなプログラム、やりやすい、その障害に合ったプログラムを組んでいただけたらいいのかなと思います。

佐藤委員)

そういう障害特性に合わせてというのはあり得ますからね。当事者の方たち何人かとお話を聞くような形、シンポジウム形式とかね。あとは知的障害の場合だと、支援者の方などと一緒に、かつ本人の声を中心に取り組む。

山中委員)

やっぱりどんなに拙くても、その当事者が自分で話すっていうことは、すごく大事なことだと思うんですね。

佐藤委員)

当事者の方たちにとっても、大きな社会参加の機会になるんじゃないでしょうか。それで自信を持っていければ、それが生きがいになって、いろいろなことのきっかけをつくれるようにも思います。

山中委員)

障害のあるなしに関わらず、同じ場所で子供たちに教えることが最善ですね。義務教育課程の小さい時から一緒に育つという。なかなかそこは自治体などでもすんなりとはいかないところが多いとは思いますが、でも働きかけをしていくにも義務教育課程のところに噛んでもらうというのは大事だと思います。

佐藤委員)

あとは市町村社協とか、福祉教育で協力校などをやってるような学校からも働きかけてもらうことも考えられます。

石橋委員)

こうした当事者を招く福祉教育みたいなものが義務教育課程では必須なんですか。

佐藤委員)

学校にそういった意向があれば実施していて、必須ではないと思います。

石橋委員)

学校が、その時の講師をどこから招くかという話になった時に、そこに彩の国いろどりライブラリーが上がるようにしたいですね。

佐藤委員)

講師をどうやって探すのとなったときに、まずライブラリーから探すかみたいな立ち位置になると良いですね。まずはそうやって使ってもらって、関係づくりをして、理解をしてもらって、こういうものがあるので便利だなと学校にも思ってもらえるというのが一つですね。

金井委員)

学校は、その地元市町村の障害ある人に声掛けすることが多いような気がします。その地域でっていうことになるので、そうすると、その要望を市町村に上げたときに、市町村の方がこのライブラリーからという頭があると、その地域に出向

いていってという感じになるところはあるかもしれませんが。

佐藤委員)

そういう市町村の方との関係を作っていくってことですよね。

金井委員)

あえてその地域の人じゃなくてもいいような気もしますしね。

石橋委員)

学校が、まず市町村に話をしに行くなら、市町村の方にもアピールして。

佐藤委員)

この展開イメージ図では、そういった形にしていきたいと示されていますが、県の教育局から図に示されてるような形で学校に紹介していただければいいですが、必ずしも約束されたものではないですし、社協という福祉教育を推進する立場から助成金などのことも含めて活用を働きかけることができますし、協力団体とプラットフォームを形成していることも、取組の拡大のために連携していける体制をとっていけるようにしたものです。

金井委員)

あとは講師側も、やはり小学校低学年、中学年、高学年に向けてそれぞれ話し方が変わったり、内容が少しずつ変わって、中学生ならばもうちょっと障害者差別解消法とか合理的配慮の話をしてもいいのかなと思いますけど、その辺のさじ加減ができる人を選んでいかないといけないところですかね。あるいは、小学生担当の人、中学生担当の人、社会人担当の人とかにするとかといったところもやっぱり講師のスキームに入ってくる。

佐藤委員)

それでは時間となりました。本日はすごくたくさんの御意見をいただきましたので、皆さんも少し整理をしていただいて、次のワーキングでも確認をしていきたい

と思いますので、よろしくお願いします。

#### 次第4 その他

事務局)

(今後のスケジュール等を説明。)

以上